

授業マネジメントの勘どころ： 話し方の勘どころ (2)

田邊祐司 Tanabe Yuji
(専修大学)

1 はじめに

前回は、「授業以前」の話し方に関する勘どころをお伝えしました。ポイントは伝えようとする教師の信念と自信でした。今回は「授業内」へと少し駒を進め、話の構成に特化した熟練教師3人の勘どころを開陳します！

2 KISS

授業は、生徒の「知りたい」という好奇心を喚起する場であると考える3人は、この観点からそれぞれの話し方に細心の注意を払っているそうです。一般に教師の話し方では、「①話の見取り図の先出し、②ナンバーリングとラベリング、③キーワードの繰り返し」などの指導技術がよく知られています(菊池, 2012)。

これらに加えて3人が常に意識しているのが、「KISS」という概念です。この言葉は、米国の旧ロッキード社傘下の軍用機を設計していたクラレンス・ケリー・ジョンソンに由来しますが、今では拡大解釈され、「Keep It Short and Simple」の意味合いで用いられています。教師の話し方の文脈で言えば、「話は簡潔かつ単純に、それも生徒の視線に寄り添いながら伝えるべきである」という意味になります。

これを座右の銘にしているA先生です。

こういう稼業をやっていると、小難しくモノを語ったり、専門用語を使ったりして、事をわざわざ複雑にして伝える術が身について…、いや、染みついてしまいます。一時は、そこから抜け出せなくなり、そんな自分がイヤになることすらありました。そんな折、田邊先生が『英語教育』(大

修館書店)の「和文英訳演習室」(2003-2009)の講評で使われていた、この“KISS”という言葉に出会いました。講評では、英作文のコツのひとつとして用いられていましたが、それはそのまま小難しいことを、偉そうに上から目線で語っていた当時の自分にズバリ当てはまりました。以来、授業のみならず部活などでも、“KISS”を意識して話したところ、生徒の理解度に大きな変化があったことを鮮明に覚えています。

C先生も一言、述べたいようです。

同感です。ていねいに話をしているようで、実はまったく伝わっていない、「なんでこんな簡単なことがわからないのか」と、全部生徒のせいにしていたバカな自分がいました。そんなとき、研究授業に来られた田邊先生の“KISS”に目が覚めました(笑)。確か、「不定詞 to」と「動名詞-ing」の違いに関するレッスンでしたよね。文法用語(ルール)をこねくり回して、独りよがりの話しをしていた私に、「もっとシンプルに、そして生徒の側に立って話しをするように」とコメントをいただきました。“KISS”はまさに覚醒の言葉でした。

嬉しい発言です。このような“KISS”への目覚めは、教師なら必ずどこかで経験すると思います。A先生が述べているように、事を難しくして話すのはもはや職業病でしょうか。教職人生のどこかで気づくのではと思いますが、実際の多くはそうではないのかも…。というのも、文科省がわざわざ「教師の話し方」というWebサイトを設けているのは、これと決して無縁ではないと思うからです。

3 一時一事

せっかく“KISS”ということをお伝えしたのに、長くなってしまいました(反省!)。次に進めましょう。これも“KISS”に関連しますが、教師があれもこれもと、伝えたいことをてんこ盛りにする傾向があるのはご存知の通りです。これもその人の授業に大きな影響を与えます。かく言う私も新人時代には、先輩から“*One thing at a time* だぞ!”と何度も注意を受けていました。

B先生に代弁してもらいます。

お隣の小学校の外国語活動に週2日、駆り出されるようになって2年になりました。5, 6年生に授業をして、痛感しているのが「一時一事」の大切さです。教師には伝えたいことが山ほどありますが、小学生に、一挙に大量の情報を盛り込むのは御法度。理解度のずば抜けた児童がいたとしても、詰め込んではいけないと改めて反省しています。それは、取り残される子どもの方が圧倒的だからです。

小学校での実践を通して、「ひとつの活動に伝えたいポイントは1つ」と確信するようになりました。それからつけ加えですが、経験とは不思議なもので、中学校の授業でも自然に「一時一事」になってきたのです。

教師はモノを知っているのだから、あれもこれもとやるのですが、児童や生徒が処理できる範囲を超えて、overflowしてしまうような詰め込みは避けるべきです。また、「聞き手に負担がないようにポイントを伝える」というのは、考えるよりも大変な技術を要求されます。初等教育の先生方の授業を参観することの大切さが言われていますが、参観した多くの先生はまさにこの一時一事を学んでくるようです。

4 キル

“KISS”にもうひとつ関係するのが、「キル」です。これは初等教育では「短文主義」と呼ばれ、「長文は避け、できるだけ短く情報を切って伝える」という意味合いで用いられています。

教員の話好きもまた職業病です(必要悪?)。専

門領域に関しての知識がふんだんにあるため、一文そのものが長くなってしまいう傾向があるのです。そして初心者も簡単にこのトラップに陥ってしまいます。どこかの元総理のように話すことを奨めているわけではありませんが、情報量が過多になると、聞き手を話に集中させることが難しくなります。

再びB先生です。

キルは田邊先生の通訳の授業で教わったことです。これは“kill”ではなく、「切る」が元になっていたと思います。長い英文をその英文のままと同じスパンで(ピリオドも英文に合わせて)訳しても、かえってこなれない日本語になってしまうことがあります。それを避けるために、情報ごとにピリオドを置くつもりで訳してみよう、というのが元々の授業のコツでした。それが今では生徒への話しで役立っているのです。

田邊先生は「耳の構文」という説明をされていましたが、言葉を耳で聞くときに大切なのは、複雑にすることではなく、そのままの流れで情報を送ることです。今では slash reading でもよく言われるようになりましたが、まさかそれが話し方に絶大な効果をもたらすとは思いませんでした。

私自身、通訳の訳出法が英語教師の話し方に変化をもたらすとは思ってもみませんでした。「キル」ということは、耳で聞く生徒に知識をスムーズに流すための潤滑油の役割を果たすのです。

5 まとめ

今回は、教師というプロだからこそ陥ってしまいがちな話し方の問題点を、3名の先生方がいかにこなしてきたかの話に終始しました。現在、そんな悩みをお持ちの方は、まず“KISS”から始めてみましょう。きっと何らかの変化が起こるはずですよ。

また、議論では、他にも、「置き換え」(生徒の言葉への置き換え)、「あるある挿入」(生徒のスキーマへの連絡)などがあがってきましたが、これらはまた別の機会にお伝えしたいと思います。今回は声の使い方に特化したお話を予定しています。

【参考文献】
菊池省三(2012).『授業がうまい教師のすごいコミュニケーション術』学陽書房。